

北の大地にはぐくまれた 伝統と文化



『蝦夷島奇観』。村上島之允の筆によるもので、1700年代終わりのアイヌの風俗を描いている。(児玉マリ所蔵)

はつめい

アイヌの人々は、川筋等の生活領域で、狩猟・採集・漁労を中心とした生業を営む中で、独自の伝統を有し、アイヌ語や独自の風俗習慣を始めとする固有の文化を発展させてきた民族です。アイヌ文化は自然とのかかわりが深い文化であり、現代に生きるアイヌの人々も自然との共生を自らのアイデンティティの重要な要素として位置付けています。

近世のアイヌ文化の大きな特色としては、狩猟・採集・漁労という伝統的生業、川筋等を生活領域とする集落の形成のほか、イオマンテ（熊など動物の神を神々の世界に送り帰す儀式）に象徴される儀式等の特徴、アイヌ文様に示される独自の芸術性、ユカラ（英雄叙事詩）を始めとする口承文芸の数々、さらには独自の言語であるアイヌ語の存在などが主要な要素として挙げられます。アイヌ文化は、歴史的遺産として貴重であるにとどまらず、これを現代に生かし、発展させることは、わが国の文化の多様さ、豊かさの証しとなるものであり、特に自然とのかかわりの中ではぐくまれた豊かな知恵は、広く世界の人々が共有する財産となるものです。

しかし、歴史的には、松前藩による支配や、明治以降、わが国が近代国家としてスタートし、「北海道開拓」を進める中でいわゆる同化政策などにより、アイヌの人々の社会や文化は決定的な打撃を受け、十分な保存や伝承が図られていたとはいえない状況にありました。また、国民一般の間では、アイヌの人々が長い歴史の中で民族としての独自の伝統や文化を培い、現在にまで伝えることについて、十分な理解が得られていないと

いう状況にもありました。

このような状況を踏まえ、国は、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（アイヌ文化振興法）を平成9年に制定し、アイヌ文化の振興を図る施策やアイヌの伝統やアイヌ文化に関する国民に対する知識の普及啓発を図るための施策を推進しています。

施策の推進に当たっては、アイヌの人々を中心に取り組まれている民間レベルの自主的な活動を尊重し、これを適切に支援していくために、民法法人（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構）を指定し、この法人を通じアイヌ文化の振興等に関する事業を実施しています。

現在、アイヌの人々は、わが国の一般社会の中で他の構成員とほとんど変わらない生活を営んでおり、独自の言語を話せる人も極めて限られた数にとどまる状況に至っています。しかし、アイヌの人々には、民族としての帰属意識が脈々と流れており、民族的な誇りや尊厳のもとに、個々人として、あるいは団体を構成し、アイヌ語や伝統文化の保持、継承、研究に努力している人々も多く、また、これらの活動に参画し、積極的に取り組んでいる関係者も少なくありません。

この「北からの発信」では、学識経験者や伝承活動実践者の方から6回にわたってアイヌの伝統やアイヌ文化をご紹介していただきます。内容は、アイヌ文化の特徴、アイヌ語、儀式、暮らし、衣服・民具、アイヌ文化の現在を予定しており、今回は、アイヌ文化の特徴についてお話しします。



木綿衣(左)と樹皮衣(右)。それぞれアイヌ語でカバラミ、アットゥと呼ばれる。カバラミは晴れ着で、主に北海道日高地方で着られた。アットゥは、おひょう、しなのきといった樹木の内皮を糸にして織った着物。



玉飾り。アイヌ語でタマサイ(左)、イムッサイ(右)、サハリンアイヌのものなどと呼ばれる。運ねた玉は、古くは中国大陸から移入されたが、江戸時代後期から明治にかけては、本州の堺や江戸でつくられた玉が盛んにアイヌにもたらされた。(左:市立函館博物館所蔵、右:児玉マリ所蔵)



イタオマチャ。江戸時代、アイヌが用いた外洋船で、この船で北海道南部やサハリンに交易に出かけた。

アイヌ文化の特徴

アイヌ文化の成り立ち

紀元前4000年ころ、本州においては、縄文時代に代わって弥生時代を迎えましたが、その文化は津軽海峡を越えることはありませんでした。この時代の北海道は縄文式土器を使用し、漁狩猟及び採集を生業とした社会が続いていました(続縄文文化)。この続縄文文化は6世紀ころまで続きますが、終末期になると本州の文化の影響が見られるようになり、次の擦文文化の時代になると、土器の製作技術、鉄器の使用などその影響は一層顕著になります。また、続縄文式土器、擦文式土器が東北地方の各地から出土しており、同時代、北海道と本州の交易・交流が盛んだったことがうかがえます。この擦文文化とアイヌ文化には、サケ・マスが遡上する河川流域に集落を形成するなどの共通性が見られます。

また、この5世紀から12世紀にかけて、北海道のオホーツク海沿岸にオホーツク文化という文化が存在しました。海獣狩猟を生業とした人々ですが、住居内に捕獲した熊の頭骨を累積し、いわゆる「骨塚」を形成するなど、オホーツク文化にもまたアイヌ文化との共通性が指摘されています。

こうした歴史の流れから、アイヌの人々は擦文文化を担った人々を「祖」とするものだと考えられ、その文化は擦文文化を継承しつつも精神文化においてはオホーツク文化の影響を受けて形成されたと考えられますが、アイヌ文化の形成年代については今なお明確ではありません。

アイヌ文化の特徴

アイヌ文化は、大きく精神文化と物質文化に分けられますが、いずれも、日々の生活の中から生まれたものです。

精神文化とは、アイヌの生活観・信仰観ですが、そこには、神々との共生があります。アイヌの人々は、自分たちの身の回りにあるものすべてが神々が人間世界にあるときの姿と考え、常に尊崇の念をもって接しました。例えば、日常使用する着物は、もちろんアイヌの人々自身が作ったものではあります。アイヌの人々は、神々の世界に在る着物の神が「着物に化身して人間の世界に降りてきた姿」であり、「自分たちのために役立ってくれている」と考えているのです。また、山野にある山菜も同様で、例えば、ギョウジャニンニクは大地をつかさどる神がアイヌの人々に遣わしてくれた「ギョウジャニンニクの神」として、決して粗末に扱つようなことはありませんでした。すなわち、余して捨てるような採り方はしなかったのです。このように、日々の生活を神々との共生として生きる姿に、採集狩猟の民としてのアイヌを見ることができるとは、

他方、物質文化は、アイヌ自ら作った「自製品」と、本州、あるいは中国大陸からもたらされた「移入品」とに分けられます。アイヌの人々が作り出した物質文化は「木の文化」であり、自製品のほとんどは木製品です。移入品は古くは中国大陸からのものが多く、アイヌはイタオマチャ(板を綴った船)を駆使して外洋を航海し、木綿、絹、青玉、蝦夷錦といった産物を入手しました。しかし、松前藩制が確立すると、移入品のほとんどは本州からのものとなり、日々の生活に大いに取り入れられました。それは日常着や晴れ着の木

綿であり、宝物・儀式で用いる漆器類でした。

過酷な生活を強いられつつも、外来の文化を取り入れ、自分たちの文化にしてしまつアイヌの力強さは私たちの想像をはるかに超えたものであり、その力で培われた文化は、時代とともに変容しながらも、現在に受け継がれています。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
秋野 茂樹



アイヌの伝統舞踊。財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が実施する「アイヌ文化フェスティバル」では、北海道各地に伝承されるアイヌの踊りが披露される。(新民族文化保存会)

掲載写真で特に断りのないものは、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構所蔵のものであります。